

第111回薬剤師国家試験

薬学ゼミナール全体総評

2026年2月23日 16:00 現在

【薬学ゼミナールより】

第111回薬剤師国家試験を受験された皆様、関係者の皆様、本当にお疲れ様でした。

※記載の数値は、薬学ゼミナールの自己採点（薬ゼミレコード）2026年2月23日（登録数9,324名）の結果に基づきます。

速報のため、入力者の増加や厚生労働省の正式な解答が発表になった後、若干の変動が生じますので、ご了承ください。

【必須問題】

必須問題全体としての平均得点率は109回78.1%、110回81.3%と比較して**若干高く、83.1%**であった。

<出題の傾向>

☑ 臨床との繋がりを意識した出題

- ・アムロジピンベシル酸塩などの**医薬品にも含まれる骨格**「ベシル酸」の**化学構造**（化学）
- ・前立腺肥大症・前立腺がんの**病変部位**である「前立腺」を**解剖図**から選択（生物）

☑ 薬剤師に求められる職能に関する出題

- ・**疾病の予防**：冠動脈疾患・心不全の予防に寄与する「ドコサヘキサエン酸」（衛生）
- ・**疾患合併患者の対応**：2型糖尿病と統合失調症（治療）、糖尿病合併妊婦（治療）
- ・**周術期の薬剤管理**：手術前後に禁忌の「ダパグリフロジン」（実務）
- ・**多職種連携**：薬剤師が連携すべき職種として「言語聴覚士」（実務）
- ・**医療安全**：一般病棟や外来処置室で常備を避ける薬剤（実務）

☑ トピックス（初出題）

- ・便秘の改善薬：「**エロピキシバット**」（薬理）
- ・急性期医療：**胸骨圧迫部位**を**解剖図**から選択する問題（実務）
- ・リード文で説明している内容を読んで、「**デ・エスカレーション**」を選択する問題（実務）
- ・「**クリニカルパス**」におけるバリエーションについて問う問題（実務）

【理論問題】

理論問題全体としての平均得点率は109回59.9%、110回58.7%と**同程度で59.2%**であった。

<連問について>

109回では生物・衛生・法規の3連問、化学・生物の2連問、薬剤の中の2連問と連問が多かったが、110回は生物・衛生の2連問が1題だけ出題されていた。111回では物理の中の2連問が1題出題された。ただし、薬理・治療による連問は、109回は2連問が4題、110回は2連問が3題出題されていたが、111回では2連問が4題（双極性障害、アレルギー性鼻炎、高血圧症・脂質異常症・労作性狭心症の合併症例、悪性リンパ腫⇒発熱性好中球減少症⇒敗血症性播種性血管内凝固症候群と病状が推移する症例）と出題が多い傾向が続いている。

<出題の傾向>

☑ 医療の進歩に対応する問題

- ・「ガルカネズマブ」「ロモソズマブ」「オシドロスタット」など**初出題医薬品**も継続出題（薬理）
- ・「**遺伝子治療**」に関する対象者や禁止項目など具体的な内容の出題（治療）

☑ 身近な生活に係る内容についての新傾向問題

- ・精白米と玄米を摂取した後の「**血糖値変化**」の違いをグラフで読み解く問題（衛生）
- ・「**医薬部外品**」に関する問題（法規）

☑ 構造式・模式図・グラフを読み解く問題

・例年通り、物理・化学・生物・衛生・薬剤を中心として、視覚的な情報を読み解いて、考察し、解答を導く問題が継続して出題されている。

【実践問題】

実践問題全体としての平均得点率は 109 回 66.7%、110 回 66.0%と比較すると若干低く、63.8%であった。

<4 連問などの連問について>

109 回で 4 連問（薬理、薬剤、実務）、110 回で 4 連問（物理、衛生、実務）が各 1 題出題されていたが、111 回では 4 連問の出題はなく、実務単問の範囲に実務、実務の連問が 1 題あった。

<出題の傾向>

☑ 医師へ薬剤選択などを提案する問題

患者情報をふまえて切替薬剤を提案したり、薬剤の中止を提案したりする問題など、患者への服薬指導や提案だけでなく、医師への提案を行う問題が継続して出題された。

☑ 患者背景を読み取ることに加えて、患者の希望をくみ取って対応する問題

症候・検査値・処方せんなどの患者情報から疾患名を判断したり、適切な薬剤を提案したりする問題に加えて、「妊娠を希望している」といった患者の希望をくみ取って対応を提案する問題なども出題された。

☑ 話題になった時事に関連する問題

- ・2025 年ノーベル生理学・医学賞を受賞した「制御性 T 細胞」に関連する問題（生物）
- ・労働災害の事例である「o-トルイジン」、「MOCA」など芳香族アミンによる膀胱がん（衛生）
- ・薬局で緊急避妊薬が購入できるようになった背景を意識させる「経口避妊薬」の問題（実務）

① 物理

必須問題の平均得点率は【80.5%】

物理化学 3 題、分析化学 2 題が出題された。アレニウスプロットを選択する問題（問 3）や、真度・精度に関するヒストグラムの問題（問 5）が出題された。

既出問題をベースとした設問も含まれており、基本的な知識の修得が重要である。

理論問題の平均得点率は【37.5%】

物理化学 4 題、分析化学 6 題と、例年通りの出題であった。

既出問題をベースとした基本的な問題（問 92、93、99）が出題されているが、容量分析法に関わる科目内連問（問 96、97）は、複合的な知識を要するため、得点しにくかったと考えられる。

実践問題の平均得点率は【25.2%】 ※自科目のみ

物理化学 3 題、分析化学 2 題が出題された。

高尿酸血症患者に関連する pH の計算問題（問 196）や内視鏡検査に関わる屈折率の問題（問 203）は、それぞれ反応式と図を読み取って正答を導く問題であった。他に計算問題は 3 題出題され、計算力を要する構成であった。

② 化学

必須問題の平均得点率は【69.5%】

有機化学、無機化学および生薬学の基礎問題が、満遍なく出題された。

全ての問題において構造式が関与しており、立体化学の Z-E 表示法（問 8）や芳香族性の有無の判断（問 9）は、特に得点してほしい問題である。また、ベシル酸の構造（問 6）や、生薬の部分構造であるフラノクマリン（問 10）では、薬物や天然物にも含まれる骨格の名称が問われた。

理論問題の平均得点率は【41.3%】

有機反応、生体分子、医薬品、生薬の各分野から幅広く出題された。

特に、化学反応式が文中に記載された問題（問101、103、104、107）が多く出題されている。また、アリスキレン関連問題（問106）のように、医薬品が模倣した生体分子の構造理解を必要とする出題もみられた。さらに、生薬関連の問題が2題（問109、110）出題されており、いずれも多様な切り口からの難易度の高い問題であった。

実践問題の平均得点率は【31.4%】 ※自科目のみ

臨床で一般的な疾患や医薬品を扱った問題が出題された。レボフロキサシン（問206）は、医薬品開発の経緯に関連した内容であり、オメプラゾール（問208）、ビルダグリプチン（問211）、ロラタジン（問213）は、生体内での薬物の化学変化を取り扱った出題であった。

総じて、化学分野では、医薬品に対するより深い理解が求められる内容となっていた。

③ 生物

必須問題の平均得点率は【78.1%】

解剖・生理学1題、生化学1題、分子生物学1題、免疫学1題、微生物学・ウイルス1題で、各範囲からバランスよく出題された。

基本的知識を問う問題に加え、解剖・生理学（問11）では、疾患に関連する部位（前立腺）が解剖図で出題された。また、生化学（問12）ではNADPH生成の基質を問うなど、既出問題から視点を変えた出題も見られた。

理論問題の平均得点率は【58.1%】

解剖・生理学3題、生化学2題、分子生物学2題、免疫学2題、微生物学・ウイルス1題が出題され、10題中3題が図やグラフを用いた問題であった。機能や病因に関する記述を選ぶ問題（問111、112、113）や、1つのテーマに対し、複数範囲に派生した知識が求められる問題（問111、問112、問115など）が出題された。

実践問題の平均得点率は【43.6%】 ※自科目のみ

解剖・生理学2題、生化学2題、免疫学1題が出題され、5題中2題が構造式を用いた問題であった。昨年に引き続き臨床につながる多角的な知識が求められる問題（問223）に加え、ノーベル生理学・医学賞で話題となった制御性T細胞に関する出題もみられた（問224）。

④ 衛生

必須問題の平均得点率は【85.8%】

健康6題、環境4題と例年通り出題された。

欠乏によりウェルニッケ脳症の原因となるビタミンB₁の構造式（問18）、冠動脈疾患や心不全の予防に寄与するドコサヘキサエン酸（問20）など、臨床に関する出題があった。既出問題をベースとした問題が多く、基本的な知識の修得が重要となる。

理論問題の平均得点率は【60.9%】

健康9題、環境11題と例年通りの出題であった。

人口ピラミッド及びその変遷に関する問題（問121）、精白米と玄米を摂取した時の血糖値の変化に関するグラフの問題（問126）など、新傾向の出題もみられた。

食品添加物（問129）、代謝的活性化による発がん物質の生成（問130）、農業に関する問題（問131）と、構造式に関する問題が出題された。既出問題レベルの基本的な問題と、やや応用力が必要な問題の二極化が見られた。

実践問題の平均得点率は【70.0%】 ※自科目のみ

出題範囲は健康4題、環境6題と例年通りの傾向であった。

実際の労働災害事例（ α -トルイジンやMOCAなど芳香族アミンによる膀胱がん）を意識した問題（問237）が出題された。熱中症予防の観点から暑さ指数を求める計算問題が3年連続で出題（問244）されるなど、計算問題がやや多く出題された。

⑤ 薬理

必須問題の平均得点率は【91.5%】

各領域から満遍なく出題されており、すべての問題は既出問題の知識により正答を導ける内容であった。治療薬を選ぶ問題が多く出題された。

なお、初出題の薬物として、臨床で注目されている瀉下薬のエロビキシバット（問36）などが出題された。

理論問題の平均得点率は【79.6%】

各領域から満遍なく出題されており、既出問題の知識で正答を導けるものが中心であった。

問151（濃度-反応曲線）は第85回問124に類似した内容であり、グラフの読み取りを問う難易度の高い問題であった。薬理と病態・薬物治療の2連問が、4題出題された。

また、薬理分野での初出題の薬物としては、問156（ガルカネズマブ）、問158（ピラスチン）、問159（ロモソズマブ）、問166（オシロドロスタット）、問168（セフトリアキソン、タゾバクタム）が挙げられる。

実践問題の平均得点率は【78.0%】 ※自科目のみ

薬理は処方薬の作用機序を問うものが中心であり、実務は状況に応じた患者対応に関する内容が中心であった。実務と薬理の連問が紐づいているもの（前問を正答できないと解けない問題）は1連問だけであった。なお、問255（グルカゴンの強心作用）に関する内容は保険適外使用に関する初めての出題であったが、作用機序から推定可能な内容であった。

⑥ 病態・薬物治療

必須問題の平均得点率は【85.1%】

病態・薬物治療13題、情報2題が出題され、各領域から満遍なく出題されたが、統計は出題されなかった。合併疾患がある場合に使用できる治療薬を選ぶ問題など、患者背景を考えて正解を導く問題が出題された（問56、62）。心臓の解剖学的理解が必要な問題が出題され、生物の知識が求められた（問58）。偽膜性大腸炎の治療薬など、疾患から適応薬を選ぶ問題が多く出題された（問61、64、66、67）。

理論問題の平均得点率は【64.5%】

病態・薬物治療は14題、情報は1題出題され、薬理と病態・薬物治療の2連問は、4題出題された。

尿所見から疾患を予測する問題が出題され、各腎疾患の病態生理の理解が求められた（問185）。

また、アルコール依存症（問187）、シェーグレン症候群（問189）、CAR-T療法（問194 選択肢4）が初出題された。110回と同様、症例や検査値から正答を導く問題が多く出題された（問154、160、167、191）。

実践問題の平均得点率は【68.0%】 ※自科目のみ

病態・薬物治療が10題出題された。110回に引き続き、情報からの出題は無かった。

過活動膀胱が初めて出題（問298）され、せん妄発症リスク因子のひとつに不眠があり、せん妄リスクの低い睡眠導入剤を選択する問題（問288-299）が出題された。

例年通り、疾患名の記載がなく、症例から疾患を判断して解く問題（問292、298）や検査値を読み取り正答を導く問題（問292、295、301）が多く出題された。

⑦ 薬剤

必須問題の平均得点率は【83.2%】

薬物動態から7題、物理薬剤から2題、製剤から6題と満遍なく出題された。

既出問題の知識を中心とした出題であったが、イヌリンの腎排泄パターンと腎排泄機構から血中、原尿、尿中のそれぞれの薬物濃度を考える複数の知識を関連付ける必要がある問題もみられた（問45）。

また、第110回と同様に、DDS（放出制御、標的指向）に関する問題が複数出題され、図や構造、計算を扱う問題は5題あり、計算問題では繰り返し投与時の血中濃度推移を考慮して解く必要があった（問46）。

理論問題の平均得点率は【55.3%】

薬物動態から8題、物理薬剤から4題、製剤から3題出題された。

設問中の条件や結果を読み取り、既出問題の知識を踏まえて解答する出題が多く見られた（問170、問173、問174、問176、問177、問178、問180、問181、問184）。特に物理薬剤学、製剤学でその傾向が強く、粒度分布のグラフとストークス式から懸濁粒子濃度の時間推移を考えたり（問181）、図内からリザーバー型と判断して解答する出題（問184）などがあった。グラフ、図、構造、計算を扱う問題は10題あり、そのうち計算問題は4題であった。。

実践問題の平均得点率は【63.9%】 ※自科目のみ

薬物動態から5題、製剤から5題であった。トランスポーターが関係する薬物相互作用（問267、問272、問275）や、DDSに関係する出題（問279、問281、問283、問284）が多く出題され、新傾向の吸収促進剤であるサルカプロザートナトリウムも出題があった。また、与えられた製剤の情報から体内動態（問275）や製剤的な特徴（問276、問281、問283、問284）を考える出題も複数あった。実務問題については、患者背景から考えられるリスク（問278）や薬物相互作用に対する薬剤師からの具体的な提案（問271、問273）など臨床的判断が必要な出題が多かった。

⑧ 法規・制度・倫理

必須問題の平均得点率は【88.2%】

例年どおり、基本的な内容を中心に、幅広い範囲から出題されていた。109回、110回に引き続き、条文の用語を穴抜きで問う問題（問72、74）が出題された。既出問題の知識を活用して解答できるものが多かったが、薬剤師綱領（問72）は初めての出題であった。

理論問題の平均得点率は【64.1%】

5年以上前の既出問題に類似した出題が多くみられた。しかし、最近の既出問題の周辺知識含め理解していれば得点に結びついたと思われる。

また、医薬部外品（問144）や、承認のための非臨床試験の定義（問145）は、6年制国家試験では初めての出題となった。

実践問題の平均得点率は【73.0%】 ※自科目のみ

臨床現場を意識した出題が多く、患者背景や処方内容に基づく出題は、近年増加傾向である。そのため、薬剤師業務につながりやすい薬剤師法（問306、309）やOTC薬（問313）、介護保険（問323）などの範囲からの出題が目立った。服薬フォローアップや訪問薬剤管理指導など、薬学業界のトピックも気にかけて学修する必要がある。

また、処方箋に基づく調剤報酬の算定に関する問題（問325）は、98回以来の出題となった。

⑨ 実務

必須問題の平均得点率は【70.3%】

既出問題の知識を用いて解答できる問題が多かったが、新傾向問題が4問（問 86、87、88、89）出題されており、急性期医療（胸骨圧迫）や多職種連携など、近年の臨床現場において薬剤師に求められる知識に関連する内容であった。

また、その他の問題についても、チーム医療や医療関連用語など、臨床現場を意識した出題が多くみられた。

実践問題（複合の実務＋実務単問）の平均得点率は【65.2%】

実践問題（複合の実務）

既出問題の知識から容易に解答できる問題も多いが、実習で学んだ知識、今後の薬剤師に求められる知識からの出題など、解答が難しい問題も一定数含まれている。受験生は得点しやすい問題を確実に正解できるようにすることが重要である。

実践問題（実務単問）

既出問題の知識から解答できる問題が多く、難易度は平易である。症例が設定されている問題が大半を占めるが、理論形式に近い問題もあり、全体的な文章量は中程度であった。がん関連の出題が多く（問 326、327、333、342、343）、医薬品の調製や支持療法、緩和ケアなど、内容も多様であった。その他、医薬品の特徴から医薬品の選択や服薬指導などに繋げる問題が多く見られた。